

自然讃歌 阿口叩の森林

妹尾治人

里山が見直され、全国各地で森の整備が行われている。廿日市市でも『郷土の森保全活動モデル事業』として、阿品の森（二一〇号市有林）が整備されている。

この事業推進に当たっては『阿品の森サポーター』の募集があり、早速九〇名（私を含めて）の参加申込みがあった。事業計画に従って平成十二年十一月十一日から、

毎月第四土曜日に森の整備が行われるようになった。

荒れ放題だった山に歩道がつけられ、樹木に名札がつけ、植林され、野鳥の巣箱が懸けられて案内板が取りつけられる。これらの作業がサポーターの手によって進められている。

整備されたその『阿品の森』を、

今年十月三日に思い立って歩いてみた。

まずは阿品台五丁目のバス停で下りて、山に向かいアパートを右側に見て進むと、やがて『阿品の森』のどでかい標柱に突き当たる。

その標柱のある広場に、江波山桜がある。この江波山桜は、昨年三月十日植樹祭記念の山下三郎市長お手植えの桜である。

広場から、案内板に従って谷筋を進むと、この森のシンボルツリー・クスノキがある。



そのクスノキの根元を測ってみると、周囲なんと四・八m、その大きな株から五本に枝分れして立ち上がっていた。

そこを右に向かつて進むと、松枯れに強いスーパーストックが植林されている。それを右に見ながら高度を上げて行くと、やがて三角点があり、更に稜線を進むと、約四〇分で高畑山（標高一九七m）に到着した。山頂への登山途中、右下に宮内工業団地が見える。

案内板には、散策コースもあるが、今日は一番道程の長い周回コース

を進む。この辺りは野鳥の森と呼ばれていて、頬が黄色くて、ツーツーピー、ツーツーピーと鳴くヤマガラが見られる。鳴き声から、シジュウガラ・ウグイス・ヤマバトもいるようだ。取付けた巣箱は、ほとんど満配だったと聞いたが、今は秋、巣箱は空屋になっていた。

秋に見る草花の中で、シラヤマギク・ミズヒキソウ・チチミザサ・ダントポロギク・ツユクサ・ガククビソウ・センダングサ・ポント

クタデ等の花が咲いていた。この阿品の森にはシダ・コケ・キノコの類も実に多い。

植物が多いと昆虫もたくさん寄ってくる。ここの広場では、カブト虫の養殖もされており、昆虫の観察会も開かれた。

周回コースも終わりに近ずき、やがて廿日市西高校の裏道路に出る。この辺りはキノコの多い場所でキクラゲ・テングタケ・シロオ

ニタケ等がある。

廿日市西高校の裏道路を下りて、出発点の広場に帰る。周回コースの所要時間は、一時間二〇分であった。

阿品の森の今後の運営は、サポーターの自主管理・自主運営に任せられることになり、平成十四年九月二十八日に『阿品の森・サポータークラブ』が誕生した。このクラブの会長大久保正人、会員は現在七一名（男五七名・女一四名）年齢は二〇代から七〇代と幅が広いのが頼もしい。

阿品の森は、名実ともに『市民の憩いの場』として生まれ変わった。

サポーターの皆さんに感謝しながら、自然観察とミニ登山を楽しませてもらった。出掛けよう 阿品の森が 呼んでいる。

〈自然観察指導員〉

編纂者後記

*故一色征忠氏の青天の霹靂ともいうべき、ご急逝により、本号を急遽、同氏の追悼号と致しました。本号の編集に当たり関係者の皆様に大変ご迷惑をお掛け致しましたこと、平にご容赦相成りたく、伏してお詫び申しあげます。

*広報はつかいち No.926 (2015.5.1)

に長期掲載の『ふるさとの歴史探訪』の筆者で当郷文研顧問石田米孝先生、『最終談』をもつて歴史探訪は終わりとか。市民に愛読されていただけに愛惜の念一入。

会報 さくらのお 第 118 号
平成 14 年 12 月 25 日

廿日市市郷土文化研究会
事務局
廿日市市佐方二丁目1-6
☎ (0829) 32-9629